

令和元年度 【 学園研究費助成金< B > 】 研究成果報告書

学部名 教育学部

フリガナ 室 雅子
氏 名 室 雅子

研究期間 令和元年度

研究課題名 家庭科教員養成における保育実習に関する研究

研究組織

	氏 名	学 部	職 位
研究代表者	室 雅子	教育学部	教授
研究分担者			
研究分担者			

1. 本研究開始の背景や目的等 (200字～300字程度で記述)

家庭科の教員として、教える内容の具体的な想像ができることは授業作りに必須だが、学生調査によると、体験不足から保育分野を教えることに自信がないという記述がみられる。保育体験は、個人的に機会を得るのは困難であり、中高家庭科免許法科目「保育学(実習および家庭看護を含む)」における保育実習の充実が期待される。しかし保育学の教授および実習内容に決まりはなく、教育実習ほど実習内容も確立していない。

本研究では「保育学」における保育実習に必要な実習事前・事後指導や実習活動、実習期間等について、中高一種免許を取得できる大学のシラバス分析や、実際の実習活動の見学から、保育学の保育実習に必要な内容や、展開の仕方について考察することを目的とした。

2. 研究の推進方策 (300字程度で記述)

- 1 家族・保育内容の指導に対する学生調査のまとめ
- 2 他大学の「保育学(保育実習を含む)」におけるシラバス分析
(家庭科教職課程生に行われている実習の現状の把握)
- 3 保育実習の現地視察と学生から回収した事後課題による分析。
- 4 家庭科教員に必要な保育実習とは何かの文献分析
- 5 実習プログラム(事前・事後学習を含む)および教材の考案
- 6 本学3年生の学生を対象に、考案した事前・事後学習と保育実習を企画と実施

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

日本における家庭科の中高一種免許を取得できる大学の「保育学」に相当すると考えられる科目(科目名称や公開されている履修の手引きと授業内容より判断)の公開シラバスを国公立大(50校)及び私立大(42校)から収集し、保育実習として行われている内容の把握を行った。その結果、“実習”には、保育園など保育施設でこどもに関わるものだけではなく、沐浴などの方法を学内で行うのみや、子育てについて大人にインタビューを行うものなど、“実習”の概念に違いがみられ、実習自体が読み取れない大学も複数見られた。また、保育士の基礎科目に近い内容展開や、育児学ではなく保育学であることの違いが曖昧に思われるものなどもあり、家庭科教員養成のための保育学の定義づけが曖昧である所以であることが考えられた。家庭科教員養成用の教科書もほぼ選択肢がない事がわかった。

実習事例見学として、候補校のうち2校で見学できた。A大学のこども園実習(2回×1時間)に参加観察を実施し、学生に事前・事後調査を実施した。本調査では、事前学習の映像によるイメージ形成の重要性と、子どもの個性への気づき、家庭科への保育分野の学習目的に対する考え方の変化が明らかとなった。さらに、学生による課題設定・検証型の授業例として、B大学の保育園実習の参加観察(1回×2時間)と課題発表会(90分・5班)に参加し、事後調査を実施した。ここでは学生に自己課題を考えさせ、検証させることによる実習の効果と課題設定の重要性が明らかとなった。これらの結果を反映し、プレ実験とは異なる実習プログラムと再検討した教材による実習実験を、こども園にて実施した。やむを得ない突発事情による休園で実習を計画の半分の時間で切り上げたため、子どもと触れ合うことによる学生の事前事後の変化は見られたが、食事援助等基本的生活の体験による効果は検証できなかった。この後2日間実習プログラムを計画したが、あいにくここでも社会事情による延期となったため、複数日数による昼食および午睡時間を含むプログラムの検証は次年度実施の課題となった。

4. キーワード (本研究のキーワードを1項目以上8項目以内で記載)

①保育学	②保育実習	③家庭科教員養成	④
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

研究成果

- ・学生調査のまとめについては、室雅子,家庭科教職課程履修生の家族・保育内容の指導に対する課題,日本家政学会第71回大会,2019.05.25,にて学会発表をし、単著・同題名にて、相山女学園大学研究論集,2020年3月発行予定,第51号社会科学編に投稿を行った。
- ・実習事後調査の分析については、次年度家庭科教育系の学会にて発表・論文執筆予定である。
- ・今後の展望としては、計画した実習が、不可抗力にて実施時間の短縮及び延期を余儀なくされたため、再度実施・検証をし、さらなる実習プログラムの精査を行いたい。また、歴史的に育児学から保育学に変わった経緯も含め、家庭科教育における保育学に求められている意義を再度検討したい。